

平成 22 年 6 月 6 日(日曜日) ミニデイ付き認知症相談・交流会「第 7 回たけのこ広場」の開催

 更新日: 2010 年 6 月 7 日



たくさんのかたが集まった「第 7 回たけのこ広場」

6 月 6 日(日曜日)午後 1 時 30 分から、ミニデイ付き認知症相談・交流会「第 7 回たけのこ広場」が開催された。「たけのこ広場」は、目黒認知症家族会「たけのこ」が主催し、ミニフォーラムや交流会をとおして認知症やその介護について理解を深めるとともに、参加を機会に、孤立しがちな認知症の方やその家族のつながりを作っていこうということをねらいとして開催しており、今年で 7 回目をむかえた。

会場横の会議室では、定例会で行っている「ミニデイ」の体験版も実施。参加者は、認知症のかたが「ミニデイ」を体験している間、「たけのこ広場」で介護者同士の交流を深めた。また、別室では、医師と区及び地域包括支援センターのスタッフが認知症の人を介護している家族などと面談し、医療・介護の両面からアドバイスできるよう予約制の個別相談会も実施した。

「たけのこ広場」の第一部はミニフォーラム。目黒認知症家族会「たけのこ」の世話人竹内弘道氏の司会で、阿部医院院長の清水恵一郎氏と権利擁護センター「めぐろ」の宮本有希子氏をゲストに、約 1 時間のフォーラムを行った。



左から、目黒認知症家族会「たけのこ」世話人の竹内弘道氏、阿部医院院長の清水恵一郎氏、権利擁護センター「めぐろ」の宮本有希子氏

認知症はゆっくりと進行していく病気。長期にわたる認知症介護では、いくつかの重要な「局面」に出会うことになる。

「その時」にあわてないためにと、「入院すること」、「食べる力が衰えてくる」この2点についてゲストの示唆に富んだ話が展開された。

「入院する」というテーマでは、「一人ひとりにあった治療とアプローチが必要。介護保険と医療保険をバランス良く利用する」「介護・医療・福祉すべての窓口になってくれるのが地域包括支援センター。遠慮なく相談に行くべき」といった介護していく上での知恵や、「(何らかの疾患で)入院することによって認知症になることはあるか」という質問に対して、「入院することは、急激に生活環境が大きく変わること。家族関係や、住まいなど急激に生活環境が変化すると認知症は進行することがある。その変化に対し、脳が考えて耐える力が衰えていると考えてください」と清水氏は認知症の進行の特徴を説明した。

また、清水氏は、「かかりつけの医師と頻繁に接触することが大切です」と話す。「患者さんの権利や尊厳を守るためにも、医師が病気だけでなく患者の生活状況などの変化に対して、早期に気づき、地域包括支援センターや権利擁護センターといった機関との連携を図ることが最も大切」という話に、参加者は真剣な表情となり、メモをとるかたもいた。

宮本氏は、権利擁護センターの様々なサービスについて紹介し、「センターの名前が硬く敷居が高く感じる方も多いと思いますが、ぜひ、相談に来てほしい」と語った。

「食べる力が衰えてくる」というテーマでは、「胃ろう(直接外から胃に穴を開けて栄養を補給していく)」という方法もあるが、認知症の進行度や年齢も加味すべき。ご本人が元気なうちに、自分がもしそうなったら、こうしてほしいという意思表示をあらかじめ確認しておくことも、家族のつらい判断を少し軽くしてあげられる」という重い内容に話が及んだが、参加者は、皆、真剣に聞き入っていた。



交流会で意見や情報の交換をする参加者

第2部の介護者の交流会では、認知症の介護者やサービス事業者など、異なった立場の方々が同じテーブルで話し合い、介護者の体験を聞き、意見や情報の交換を行っていた。